



筑紫女学園大学リポジット

Outlaw Ballads in the Nineteenth Century (1) : Sir Walter Scott and the Outlaw Tradition

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮原, 牧子, MIYAHARA, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/565

19世紀アウトロー・バラッド詩の系譜(1)

—Sir Walter Scott とアウトローの世界—

宮 原 牧 子

Outlaw Ballads in the Nineteenth Century (1)
—Sir Walter Scott and the Outlaw Tradition—

Makiko MIYAHARA

序

19世紀に作られたバラッド詩のうち、アウトローを題材にしたものには以下の作品がある。*

Sir Walter Scott (1771 – 1832)	“Alice Brand”
Leigh Hunt (1784 – 1859)	“Robin Hood a Child”
	“Robin Hood’s Flight”
	“Robin Hood an Outlaw”
	“How Robin and His Outlaws Lived in the Woods”
Thomas Love Peacock (1785 – 1866)	“Bold Robin Hood”
	“The Friar of Rubygill”**
	“Robin Hood and the Two Grey Friars”
John Keats (1795 – 1821)	“Robin Hood”
W. Harrison Ainsworth (1805 – 82)	“Black Bess”
	“The Legend of the Lady of Rookwood”***
	“The Old Oak Coffin”***
William E. Aytoun (1813 – 65)	“Little John and the Red Friar”
Charles Kingsley (1819 – 75)	“The Outlaw”
Richard Garnett (1835 – 1906)	“The Highwayman’s Ghost”

* バラッド詩の定義については、「英国バラッド詩アーカイブ」(<http://literaryballadarchive.com/ja/>) を基にしている。

** 小説 *Maid Marian* 収録作品。小説の題材はアウトローであるが、バラッド詩の主題はアウトローではない。

*** 小説 *Rookwood* 収録作品。小説中アウトローは重要なモチーフとなっているが、バラッド詩の主題はアウトローではない。

この他、アウトローをモチーフとして登場させるものまで含めるならば、さらに多くの作品が挙げることができる。この流れをうけて、20世紀には Alfred Noyes (1880–1958) が、“The Ballad of Dick Turpin”、“The Highwayman”、“Will Shakespeare’s out like Robin Hood”といったバラッド詩を書き残している。また、19世紀以前には Thomas Campbell (1777–1844) がアウトローの処刑を題材に、“Gilderoy”というバラッド詩を書いている。19世紀のアウトロー・バラッド詩の系譜の一側面は、伝統的アウトローの世界観とゴシック的要素の融合である。そして、この流れの起点となったのは、Sir Walter Scott (1771–1832) のバラッド詩“Alice Brand”であったと考えられる。

スコットは、長編詩 *The Lady of the Lake* (1810) の中に「アリス・ブランド」というバラッド詩を挿入している。この詩は、伝承バラッドの伝統的アウトローの世界観を持ちながらも、恐ろしい妖精が登場するという、新しいハイブリッド型バラッド詩である。一方で、スコットはこのバラッド詩が収録されている「湖上の麗人」や小説 *Ivanhoe* (1820) においては、伝統的アウトロー像を崩すことなく、ロビン・フッドを作中に登場させている。尤も、そこには時代を反映したロビン像の変化が見受けられる。本論では、スコットが描いた19世紀のロビン・フッド像、アウトロー像とはどのようなものであったか、またスコットのアウトロー・バラッド詩が持つ系譜上の意義とは何であるのかを探る。

I.

伝承バラッドにおけるロビン・フッドは、時代によってその英雄像に変化が見られる。中世にうたわれたバラッドの中のロビンは、民衆のために戦うヒーローではあるが、その絶対的な強さに伴う残虐さに歯止めをかけるものは無い。中世バラッド “Robin Hood and Guy of Gisborne” (Child 118) においてロビンは、自分の命を狙って森にやってきたガイと弓の腕比べをして勝利した後、ガイの顔を八つ裂きにする。

Robin pulled forth an Irish kniffe,
And nicked Sir Guy in the fface,
That hee was neuer on a woman borne
Cold tell who Sir Guye was. (st. 42)¹

既に打ち負かした相手に対するこの仕打ちは、現代人にとっては正に目を覆わんばかりの蛮行である。しかし、時代を経るにつれ、このような残虐性は姿を消し、ロビンの力は弱まり、勝負に負けるコミカルなロビン像が見られるようになる。また、それと同時にロビンの貴族化が行われていく。ブロードサイド・バラッド “Robin Hood and Queen Katherine” (Child 145) においては、お馴染みのリンカン・グリーンの衣を脱ぎ、宮廷風の緋色の衣を身に纏って女王に謁見するロビンの出自について、‘Robin Hood we must call Loxly’ (st. 10) とうたわれる。さらに、1632年に Martin Parker によって登録されたブロードサイド・バラッド “A True Tale of Robin Hood” (Child 154) では、

ロビンとその仲間たちの暴力行為について、ロビンらに非があったことまでが容赦なく語られ、その贖罪までもがうたわれる。

With wealth which he by robbery got
Eight almes-houses he built,
Thinking thereby to purge the bolt
Of blood which he had spilt. (st. 71)

このような身分の格上げ、道徳的辻褄合わせの背景には、社会的要因が関わっている。15世紀にロビン・フッドは五月祭の芝居の演目として大いに人気を博すようになったが、16世紀に入ると風紀的・宗教的に不適切であるという理由から、芝居が禁止されるようになる。

The campaign to suppress Robin Hood's subversive role in the May Games was only one part of a broader attempt in Elizabethan and Jacobean culture to render him less threatening to the social and political order. This effort also manifested itself on the contemporary stage, where playwrights set out to create a new, less dangerous Robin Hood.²

ロビンの生き残りをかけて行われた、彼の破壊的側面の抑制は、劇作だけでなく、ブロードサイド・バラッドにも少なからぬ影響を与えた。

Barczewski は、ロビン・フッドは19世紀にアーサー王と並んで国民的英雄となったと指摘しているが、その英雄化の過程において、ロビン・フッド・バラッドの蒐集を行った Joseph Ritson が後世に与えた影響は大きい。

[Ritson] . . . impressed upon his readers that Robin Hood's actions, which he deemed 'patriotic exertions', were not traitorous. Patriotism, he asserted, meant more than just blindly taking up arms to defend one's country from its external enemies. Sometimes 'true' patriotism meant recognizing that the real 'traitors' — the opponents of liberty and equality — were those who were most eager to wave the flag and beat the war drum, and acting to overcome the oppression and tyranny they promoted. It was this second kind of patriot which, according to Ritson, Robin Hood had been. Rittson's work was extremely influential in transforming Robin Hood into a national hero . . .³

リットソンはフランス革命に共鳴し、終生共和制を支持した人物であった。Dobson と Taylor が 'The sentiments here are of course those of the French Revolution . . . and . . . of Tom Paine'⁴ と指摘するように、リットソンが1795年に出版した *Robin Hood: a Collection of All the Ancient Poems, Songs, and Ballads, Now Extant, Relative to that Celebrated English Outlaw* の序文には、彼の個人

的な政治思想が窺われる。彼は、ただ武器を手にとって戦うだけが愛国者ではないこと、自由や平等を奪う反逆者による圧政に対して行動を起こすものこそが愛国者であることを主張する。つまり、彼が提示したロビン・フッド像とは、「野蛮な暴政の時時代に、自由と独立の精神を貫いた人物」であり、「弱気を助け、強気を挫く」、「道徳的ヒロイズム」に溢れた英雄なのである。⁵

[Robin] took away the goods of rich men only; never killing any person, unless he was attacked or resisted; that he would not suffer a woman to be maltreated; nor ever took any thing from the poor, but charitably fed them with the wealth he drew from the abbots. I disapprove, says he, of the rapine of the man; but he was the most humane and the prince of all robbers.⁶

このように、リットソンが提示したのは、中世のロビン像とはかけ離れた、お上品なロビン像であった。彼は、ロビンの身分についても、1160年頃にノッティンガムシアのロクスリーで生まれた Huntingdon 伯爵であるという説を採っている。⁷スコットは小説『アイヴァンホー』のロビンの英雄像を描くにあたり、リットソンの影響を受けたとされている。⁸サクソンとノルマンの戦いを描く『アイヴァンホー』において、ロビンは揺るぎない愛国心をもつサクソン人として描かれるのである。Bratton は19世紀のバラッド詩について、‘On the popular level expressions of patriotism and nationalistic fervour had been becoming more and more common throughout the previous century’⁹と述べているが、Stephen Knight はロビンを大衆文化のレベルから文学のレベルに引き上げたことこそ、スコットの功績であると指摘する。¹⁰伝承バラッドやブロードサイド・バラッドのロビン・フッド像は、小説『アイヴァンホー』によって、更なる格上げがなされ、それに伴い更なる変容を遂げるようになったのである。

II.

スコットは、『アイヴァンホー』の舞台を Richard I の治世に設定し、それを古き良き時代の「名残り」(‘the remains’, 15)¹¹だけが残る時代であると、作品冒頭で述べている。

In that pleasant district of merry England which is watered by the river Don, there extended in ancient times a large forest . . . [A]nd here also flourished in ancient times those bands of gallant outlaws, whose deeds have been rendered so popular in English song. (15)

「勇ましきアウトローたち」とは、この小説にも登場するロビン・フッドとその仲間たちのことである。この小説は、サクソン人郷士 Cedric に勘当された息子 Wilfred (アイヴァンホー) が、ノルマン人であるイングランド王リチャードらと共に、王弟 John の部下 Bois-Guilbert らと戦い、勝利する物語である。ロビンはあくまでも脇役であり、行きがかり上、リチャード王やアイヴァンホーに力を貸すことになるのだが、古き良き時代の象徴としての役割を担ったロビンの存在の重要性

は、このように作品冒頭で強調されている。¹²

この小説におけるロビンの役割について Knight は、'Locksley's major role is to act as military support and security officer to the force of good throughout the story'¹³と指摘しているが、その長たる王に対するロビンの忠誠心は、この小説の中に繰り返し描かれる。¹⁴ロビンが小説に初登場するのは第7章であるが、第13章で初めてその名が'Locksley'であることが明かされる。ここでロビンは弓術の試合に参加することになり、その卓抜した技でその場にいた者たちを驚かせ、そしてこれがロビン・フッドであることを知る読者を納得させる。ロクスリーと名乗るこの男にそれまで散々小馬鹿にされていた王弟ジョンでさえ、ロビンを自分の部下にしようとするが、"Pardon me, noble Prince . . . but I have vowed, that if ever I take service, it should be with your royal brother, King Richard." (124)と、即座に断られる。国王と国への忠誠は、愛国者ロビンの揺るがぬ信条である。第20章で、正体を隠し黒騎士と名乗るリチャード王に名を尋ねられた際にもロビンは、'I am . . . a nameless man; but I am the friend of my country, and of my country's friends' (169)と答える。

小説の中でスコットは、理想的な国家においては、公平さと秩序が保たれ、国王は人民の味方であると繰り返し述べる。第23章の最後にスコットは小説の筋を離れ、Dr. Henry によるサクソン年代記の記述の一部を引用し、小説の舞台となっている時代について次のように述べている。

It is grievous to think that those valiant barons, to whose stand against the crown the liberties of England were indebted for their existence, should themselves have been such dreadful oppressors, and capable of excesses country not only to the laws of England, but to those of nature and humanity. But, alas! we have only to extract from the industrious Henry one of those numerous passages which he has collected from contemporary historians, to prove the fiction itself can hardly reach the dark reality of the horrors of the period. The description given by the author of the Saxon Chronicle of the cruelties exercised in the reign of King Stephen by the great barons and lords of castles, who were all Normans, affords a strong proof of the excesses of which they were capable when their passions were inflamed. "They grievously oppressed the poor people by building castles; and when they were built, they filled them with wicked men, or rather devils, who seized both men and women who they imagined had any money, threw them into prison, and put them to more cruel tortures than the martyrs ever endured." (192)

英国の自由を守るべき豪族たちが圧政者となり、自然の道や人の道を外れ、貧しき者たち('the poor people')を苦しめる。残虐性はロビンから、ノルマンの貴族たちに譲り渡され、むしろロビンは理想的な国王像をも具現化しているのである。ロビンが自身を「民衆の友」と語るのと同様、ロビンが語る理想の国王像もまた、'a friend to the weaker party' (169)であると述べられる。

ノルマン貴族たちの圧政とその残虐ぶりに比べ、ロビンたちアウトローの世界では公平さと秩序が保たれている。下の引用は、ユダヤ人 Isaac の娘 Rebecca に金を託されたアイヴァンホーの仲間 Gurth が、ロビンら盗賊の仲間に捕る場面である。盗賊たちが財布を調べている隙をつき自由の身

となったガースは、盗賊の一人が持っていた六尺棒を奪うと、^{かしら}頭であるロビンを殴り倒す。しかしロビンはガースが、自分たちと同じ境遇にある「勘当の騎士」(アイヴァンホー)の仲間であることを理由に寛大さを示し、Miller(粉屋)と六尺棒の勝負をさせる。その勝負を見届けたアウトローたちは、“Well and yeomanly done! . . . fair play and Old England for ever!” (106) と叫ぶ。古き良きイングランドの‘fair play’は、アウトローの世界に残っていたのであり、その世界の王は‘a throne of turf’ (272) に座る ‘King of Outlaws’ (360) たるロビンである。このような公平さは、第32章で戦いが終わった後、ロビンが夥しい数の分捕品を分ける場面でも次のように語られる。

Locksley now proceeded to the distribution of the spoil, which he performed with the most laudable impartiality. A tenth part of the whole was set apart for the church, and for pious uses; a portion was next allotted to a sort of public treasury; a part was assigned to the widows and children of those who had fallen, or to be expended in masses for the souls of such as had left no surviving family. The rest was divided amongst the outlaws, according to their rank and merit . . . (278)

ブロードサイド・バラッド「ロビン・フッドの真実の物語」を彷彿させる、このようなロビンの公平さと慈善の心を目の当たりにしに黒騎士(国王)は、驚きを隠せない。

The Black Knight, who had seen with no small interest these various proceedings, now took his leave of the Outlaw in turn; nor could he avoid expressing his surprise at having witnessed so much of civil policy amongst persons cast out from all the ordinary protection and influence of the laws. (293)

国王の驚きの原因は、無法の世界に秩序が存在し、政治が成り立っていることにある。しかし、‘gallant Outlaw’ (293) たるロクスリーは次のように答える。

“Good fruit . . . will sometimes grow on a sorry tree; and evil times are not always productive of evil alone and unmixed. Amongst those who are driven into this lawless state, there are, doubtless, numbers who wish to exercise its licence with some moderation, and some who regret, it may be, that they are obliged to follow such a trade at all.” (293)

失われた秩序や善良なるものは、皮肉にも無法者たちの世界にのみ存在しているのである。

黒騎士との別れ際、ロビンは自らの角笛と飾り帯を渡し、困った時には角笛を吹くよう告げる。¹⁵その後、角笛の音により再会した黒騎士とロビンは互いの正体を明かし合うが、本来 ‘gay, good-humoured, liberal, and fond of manhood in every rank of life’ (365) という性質の国王は貴族たちと過ごすよりも、ロビンらと過ごす時を大変気に入る (cf. 365)、いつまでも森を離れようとしな

い。‘The merry King, nothing heeding his dignity any more than the company, laughed, quaffed, and jested amongst the jolly band’ (365) と描かれる国王の喜び様は、中世バラッド “A Gest of Bobyn Hode” の国王のはしゃぎぶりを彷彿とさせるほど、無邪気で明るい。¹⁶このように、『アイヴァンホー』において理想的な世界、理想的な国王を描く場面は、いずれも伝承バラッド的な爽やかな笑いに満ちている。第16章における黒騎士とタック和尚の酒盛り（その際タックが黒騎士にうたってくれと望むのもバラッドである）も、第26章における Wamba の身を挺したセドリック救出の場面も、第32章における黒騎士とタック和尚の勝負も、同様にバラッドのモチーフが散りばめられた爽快さに満ちている。

しかし、国王は森の中で暮らすことはできない。『アイヴァンホー』と伝承バラッドやブロードサイド・バラッドの大きな違いの一つは、アウトローと国王の関係を描く際の厳しさにある。Knight が ‘It seems very likely that Scott found Robin Hood the resistant yeoman too threatening to use him as the noble Saxon’¹⁷と指摘するように、ロビンは所詮国王とその法治国家とは相容れぬアウトローであり、その力には限界がなければならない。リットソンの影響を受けたスコットではあるが、リットソンが提示した無害なロビン像に反して、スコットはアウトローの暴力性を無視してはいない。そして、その限界はロビン自身が心得ている。アウトローたちが本来持つ暴力性を見抜き国王を心配するアイヴァンホーの心中を察し、国王を元の世界に戻そうとするのは、他ならぬロビンである。(cf. 365-66)

The Robin Hood of *Ivanhoe*, like Cedric the Saxon and even Ivanhoe himself, is a character compelled to sacrifice at least part of his idyllic freedom in the cause of order and strong government. Despite his personal bravery and the loyalty of his men, Scott's Robin Hood is a figure condemned to extinction by the inexorable laws of the historical process.¹⁸

そのためスコットもまた、この小説におけるロビンの退場の場面で、彼を元の世界、すなわちバラッドの世界に戻す。ロビンのその後については次のように語られ、第42章以降は、国王が懐かしそうにアウトローたちのことを思い起こすのみである (cf. 379)。

As for the rest of Robin Hood's career, as well as the tale of his treacherous death, they are to be found in those black-letter garlands, once sold at the low and easy rate of one halfpenny
(368)

ところが、この ‘garlands’ の中でうたわれるバラッドそのものについて、スコットはいささか厳しい視線を投げかけるのである。下の引用は、アイヴァンホーに密かに想いを寄せるレベッカが、栄光など求めて無駄死にすることなど無意味だと、彼に忠告する言葉である。¹⁹

“Glory . . . is the rusted mail which hangs as a hatchment over the champion's dim and

mouldering tomb — is the defaced sculpture of the inscription which the ignorant monk can hardly read to the inquiring pilgrim — are these sufficient rewards for the sacrifice of every kindly affection, for a life spent miserably that ye make others miserable? Or is there such virtue in the rude rhymes of a wandering bard, that domestic love, kindly affection, peace and happiness, are so wildly bartered, to become the hero of these ballads which vagabond minstrels sing to drunken churls over their evening ale?” (249)

小説には伝承バラッド的要素が存分に描かれているにも拘わらず、物語が結末に向かうにつれ、アウトローに対する、そしてバラッドそのものに対する作者スコットの冷静な態度が表れ始める。小説冒頭で述べられていたように、時はもはやアウトローたちがのりを超えて活躍する時代ではない。また、興味深いのは、ユダヤ人を描く際にもその美德を認めニュートラルな立場を保つスコットは、サクソンとノルマンの対立についても、彼の時代には極めて珍しく、中立の立場を保っているということである。ロビンが森へと戻された後、この物語世界に秩序をもたらすのは、結局サクソン人ロビンではなく、ノルマン人国王である。

Ⅲ.

スコットはロビン・フッド・バラッド詩を書き残してはいない。アウトローを題材としたバラッド詩は前述の「アリス・ブランド」と、長編詩 *Rokeby* (1813) に挿入された “The Outlaw”²⁰のみである。長編詩「湖上の麗人」に挿入されたバラッド詩「アリス・ブランド」は、恋人の兄を殺した男が女と駆け落ちし、アウトローとして生きる決心をして森に逃げ込む物語である。

Merry it is in the good greenwood,
When the mavis and merle are singing,
When the deer sweeps by, and the hounds are in cry,
And the hunter's horn is ringing. (st. 1)²¹

主人公たちが森に逃避するという設定は、追放され森を住まいとすることを余儀なくされた貴族ロビンのそれと重なる。また、この一連目は、まるで伝承バラッドの中のロビン・フッド・バラッドの出だしそのものである。「緑の森」、「鳥の囀り」、「跳びはねる鹿」、「角笛」、どれもがロビンをうたう伝承バラッドには定番のモチーフであり、このバラッド詩の舞台が伝統的アウトローの世界を意識したものであることが分かる。また、「陽気な」(‘merry’)という言葉は、伝承のロビン・フッド・バラッドにも度々見られる単語であると同時に、産業革命を経て経済発展を遂げ、大きな変革を遂げつつあった19世紀の英国においては特別な意味があった。人々がノスタルジーを込めて、自国を ‘Merry England’ と呼んだ時代である。²²

しかし、このバラッド詩のその後の展開は、伝統的なロビン・フッド・バラッドのそれとは大き

く異なる。Alice の恋人 Richard は森の中へ踏み込むために、目の前の木を切り倒す。

'Now must I teach to hew the beech
The hand that held the glaive,
For leaves to spread our lowly bed,
And stakes to fence our cave. (st. 4)

ロビン・フッドらアウトローをうたう伝承バラッドの中で、このように人間があからさまな自然破壊をすることは無い。ここに描かれているのは、自然をありのままに受け入れられなくなった人間の傲慢さであると読むべきであろう。そのような人間には、もはや森の妖精たちも寛容ではない。

緑は伝承バラッドにおいてはロビンが身に纏う衣の色であるが、生まれ故郷を捨てたこのバラッド詩の恋人たちが身に纏うのもまた、緋色ではなく森の緑の衣('the forest-green', st.7, l. 4)である。しかし、この緑の色、そして前述の森の木々の破壊する行為、鹿を狩る行為どれもが、この森に住む妖精の王を激怒させる。妖精の王は恐ろしい声で('His voice was ghostly shrill', st.10, l. 4)²³、次のように言う。

'Why sounds yon stroke on beech and oak,
Our moonlight circle's screen?
Or who comes here to chase the deer,
Beloved of our Elfin Queen?
Or who may dare on wold to wear
The fairies' fatal green? (st. 11)

伝承バラッドにおいても、緑の色は妖精の、或は異界の色として登場する。しかし、伝承の世界では妖精とロビンらアウトローの住み分けは明解であり、両者の世界が混じり合うことはない。²⁴故に、伝承バラッドの世界でロビンが妖精の怒りを買うことも無かった。ここで注目すべきは、森の中の世界が、人間であるアウトローが容易に住む場所ではなくなったということである。

妖精の王は手下 Urgan を二人の元へ送る。アリスがアーガンにその正体を尋ねると、アーガンは次のように答える。

'And gayly shines the Fairy-land —
But all is glistening show,
Like the idle gleam that December's beam
Can dart on ice and snow. (st. 21)

妖精の姿も、伝承の世界とは異なり、儚げな影にすぎない。妖精の存在もまた、時代の流れと共に、

不安定なものになってしまったことがうたわれている。アリスが三度十字を切ると、アーガンは元の姿、リチャードが殺めたと考えられていた Ethert Brand に戻る。²⁵

このような、アウトロー・バラッドの要素と恐ろしい異界を舞台とするバラッドの要素との混交は、その後19世紀後半に書かれたゴシック・アウトロー・バラッド詩ブームの出発点として、とても重要な意義がある。この混交は、「湖上の麗人」全体にも見られる。ジェイムズは長編詩の冒頭から、このリンカン・グリーンの特衣を纏って登場する。森の中で道に迷ったジェイムズは助けを求めて角笛を吹くが、彼が二度目の角笛を吹いた時に現れたのは、リトル・ジョンら森の仲間ではなく、森の中の館に住む美女エレンであった。彼女の姿は ‘a fey in fairy land’ (Canto1, XXII) であるかのようにと描かれ、さらにジェイムズを森の中に建つ館に案内する際に彼女は、その館を ‘the enchanted hall’ (Canto1, XXVI) と冗談めかして紹介し、自分たちを ‘weird women’ (Canto1, XXX) であると紹介する。アウトローの活躍する森が同時に妖精たちの住処であることが、ここでもうたわれているのである。同様に、ソング「アウトロー」においても、昔ながらのアウトローの生活が無邪気に思い描く乙女に対し、変質してしまった森のアウトローの生活と乙女の思い描くノスタルジックな幻想との違いを男が語る。男は ‘The fiend whose lantern lights the mead / Were better mate than I’ (l. 51-52)²⁶と、乙女に警告するのである。

一方で、このバラッド詩を「湖上の麗人」のヒロイン Ellen がうたい終わると同時に、ロビン・フッド風の装束を身に身を包んだ James Fitz-James (その正体はスコットランド国王) が登場することは、非常に興味深い。

Just as the minstrel sounds were stayed,
A stranger climbed the steepy glade;
His martial step, his stately main,
His hunting-suit of Lincoln green,
His eagle glance, remembrance claims —
'Tis Snowdown's Knight, 'tis James Fitz-James. (Canto 4, XVI, 1-6)

この「リンカン・グリーンの特衣」はただのモチーフではない。Canto 5 には、城の広場にモリス・ダンスの踊り手たちが登場する。

Now, in the Castle-park, drew out
Their checkered bands the joyous rout.
There morricers, with bell at heel
And blade in hand, their mazes wheel;
But chief, beside the butts, there stand
Bold Robin Hood and all his band, —
Friar Tuck with quarterstaff and cowl,

Old Scathelocke with his surly scowl,
Maid Marian, fair as ivory bone,
Scarlet, and Mutch, and Little John;
Their bugles challenge all that will,
In archery to prove their skill. (Canto 5, XXII)

小説の登場人物としては現れないロビンであるが、このように小説の筋とは無関係に、しかし重要な位置を占めて言及されている。スコットランド王ジェイムズは、明らかにロビン・フッドを意識した人物なのである。スコットは、『アイヴァンホー』同様、ここにも伝統的アウトローを描いている。尤も、『アイヴァンホー』と同じくこの長編詩においても、混乱した世の中に秩序をもたらすのは、アウトローではなく国王である。バラッド詩のいわばフレームたる「湖上の麗人」は、Malcolm Graeme に恋するエレンに、スコットランド国王ジェイムズとこれに反乱を起こすハイランドの Roderick Dhu が思いを寄せるという物語であるが、最後にはジェイムズが国王としてエレンとマルカムの窮地を救い、二人の仲を祝福するのである。

結び

スコットのバラッド詩は、伝統的アウトローの世界と妖精たちの住む異界の二面性を持った作品である。しかし、そこには珍しさばかりでない、時代を反映した意図があったと考えることができる。「湖上の麗人」においても『アイヴァンホー』においても、アウトローは極めて魅力的、かつ重要な存在でありながら、最後には力を失い、作品全体に秩序をもたらす役割は国王に託される。Braczewski はアーサー王伝説は ‘an elite property’ であると指摘する一方、ロビン・フッド伝説は本来 ‘peasant grievances found literary expression’ であったとしながらも、ロビンの貴族化によって二面性を持つようになったことを指摘しているが、²⁷ロビンはその二面性故に、アーサー王よりもその存在が非常に危うい土台の上に成り立っているのと考えられる。スコットの作品を通じて読み取ることができるのは、アウトローの力の限界である。その描き方は辛辣であり、ロビンの脆弱化をコミカルにうたったブロードサイド・バラッドのそれとは、明らかに異質のものである。スコットの作品に見られるアウトローの力の限界の背景には、19世紀がもはやアウトローが活躍する時代ではなくなったこと、そして森が人間の世界とは相容れぬものとなりつつあり、その森の変質、いや人間の変質により、森の中におけるアウトローの力がはく奪されてしまったという事情があると考えられる。バラッド詩における緑の森は、本来持っていた魔性がより強調され、その後のアウトロー・バラッド詩の系譜の中で、その傾向はより強まっていくのである。

注

1. Francis James Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads* vol. III (Dover, 1965) p.93. 以下、伝承バラッドの引用は、全てこの版に拠る。

2. Stephanie L. Barczewski, *Myth and National Identity in Nineteenth-Century Britain: The Legends of King Arthur and Robin Hood* (Oxford UP, 2000) 21-22.
3. *Myth and National Identity in Nineteenth-Century Britain*, 43.
4. R. B. Dobson and J. Taylor, *Rhymes of Robin Hood: An Introduction to the English Outlaw* (Book Club Associates, 1976) 55.
5. Cf. *Myth and National Identity in Nineteenth-Century Britain*, 76.
6. Joseph Ritson, *Robin Hood: A Collection of All the Ancient Poems, Songs, and Ballads, Now Extant, Relative to that Celebrated English Outlaw* (Cambridge UP, 2015) vol. 1, ix.
7. Cf. “A seventeenth-century antiquarian, Roger Dodsworth, gives details of the ‘Robin of Locksley’ tradition, which influenced Sir Walter Scott’s *Ivanhoe* amongst others . . .” [Geoff & Fran Doel, *Robin Hood: Outlaw or Greenwood Myth* (Tempus, 2000) 74] と指摘されているように、「ロビン＝ロクスリー」説の起源は17世紀に遡る。
8. Cf. ‘Ever since Joseph Ritson, himself a supporter of the French Revolution, wrote his biography of Robin Hood in 1795, which influenced Scott’s *Ivanhoe*, children’s writers and films have shown Robin championing the poor against the rich and specifically the Saxon peasantry against their Norman overlords with their feudal system and savage game laws.’ (*Robin Hood: Outlaw or Greenwood Myth*, 10)
9. J. S. Bratton, *The Victorian Popular Ballad* (Rowman and Littlefield, 1975) 41.
10. ‘[P]erhaps Scott’s most important move was to take Robin Hood out of marginal theater, antiquarian anthologies, fugitive garlands, and the private thoughts of poets, and to insert him into the middle of the dominant and massively developing genre of the period, the novel.’ [Stephen Knight, *Robin Hood: A Mythic Biography* (Cornell UP, 2003) 116.]
11. Walter Scott, *Ivanhoe* (Penguin Books, 2000) 15. 以下、*Ivanhoe* の引用は、全てこの版に拠る。なお、本文中のカッコ内にページ数を示す。
12. ちなみに、第15章において、兄であるリチャードが帰ってくることを恐れる王弟ジョンに家臣たちは ‘These are not the days of King Arthur . . .’ (134) と言って安心させる。アーサー王の時代もまた、過ぎ去ってしまった時代として描かれている。
13. Stephen Knight, *Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw* (Blackwell, 1994) 173.
14. ロビンの国王への忠誠心は、伝承バラッドやブロードサイド・バラッドにおいても、度々うたわられてきたモチーフの一つである。
15. 窮地に陥ったロビンが角笛を吹き仲間たちが助けに参集するのは、中世から続くロビン・フッド・バラッドに定番のモチーフである。
16. 中世バラッド「ロビン・フッドの武勲」第8部では、ロビンらと仲良くなった国王のはしゃぎぶりが次のようにうたわれている。‘They bente theyr bowes, and forth they went, / Shotynge all in-fere, / Towarde the towne of Notyngnam, / Outlawes as they were. // Our kynge and Robyn rode togyder, / For soth as I you say, / And they shote plucke-buffet, / As they went by the way. // And many a buffet our kynge wan / Of Robyn Hode that day, / And nothyng spared good Robyn / Our kynge in his pay.’ (sts. 423-25)
17. Stephen Knight, *Reading Robin Hood: Content, form and reception in the outlaw myth* (Manchester UP, 2015) 152.
18. *Rhymes of Robin Hood*, 57. スコットは小説『ロブ・ロイ』においても、時代の流れに飲み込まれる英雄を描いている。Cf. 「その勇敢な行動と、強気をくじき弱きを助ける義侠心のために『スコットランドのロビン・フッド』と称され、伝説の英雄となる。主人公のスコットランドへの旅は、父親を経

済的な危機から救うという個人的な動機によるものであった。しかし、その旅の過程で、彼は政治や経済の変化によって生じる社会の混乱に巻き込まれることになる。」[米本弘一、『フィクションとしての歴史—ウォルター・スコットの語りの技法—』（英宝社、2007）98-99.]

19. Knight がこの小説を ‘a conflict against authority’ であるとしながらも ‘*Ivanhoe* is not bemused by noble blood’ (*Robin Hood: A Complete Study of the English Outlaw*, 175) と指摘しているように、この小説の中で騎士道精神を発揮するのも騎士ばかりではない。ウォンバのように騎士の身分でない者たちや、無法者ロビンもまた、騎士道精神溢れる人物として描かれている。
20. スコット自身、これを ‘Song’ と題しているが、形式・テーマ共にバラッド詩と捉えられる。
21. Sir Walter Scott, *The Lady of the Lake*, ed., Graham Tulloch (Dodo Press, n.d.) 77. 以下、*The Lady of the Lake* の引用は、全てこの版に拠る。なお、本文中のカッコ内にページ数を示す。
22. Robert Blatchford が著書 *Merry England: A Plain Exposition of Socialism, What It Is and What It Is Not* (Andesite Press, 2015) の中で19世紀の英国の資本主義や競争社会の残酷さ、農業の衰退への嘆き、田園風景の消失への落胆などを綴っている他、William Harrison Ainsworth (1805-82) は、1874年に発表した小説 *Merry England: or, Nobles and Serfs* において、1381年に起きた農民の反乱「ワット・タイラーの乱」をモチーフにしながら、古き良き時代の農村を守ろうと戦った三人の男たちの物語を書いている。
23. スコットもバラッド詩中に用いている ‘ghostly’ という単語は、後のゴシック・アウトロー・バラッド詩にも多用される単語である。
24. チャイルド・バラッド中の唯一の例外は、18世紀後半に作られた “Robin Hood’s Birth, Breeding, Valor, and Marriage” (Child 149) であろう。このバラッドでは、ロビンが羊飼いの女王グロリンダ (妖精) と結婚する。
25. ‘Tam Lin’ (Child 39) のように伝承の妖精バラッドにおいては、妖精界から人間が救出される (戻ってくる) 話は定番である。
26. “The Outlaw” からの引用は全て、*Rokeby* (Palala Press, 2016) に拠る。
27. Cf. *Myth and National Identity in Nineteenth-Century Britain: The Legends of King Arthur and Robin Hood*, 19.

(みやはら まきこ：英語学科 准教授)